

子どもの時

河野 優子



息子が通う小学校では読み聞かせの時間があり、ボランティアのお母さん達が順番に読み聞かせをします。一心にお話に聞き入り、絵を見つめる子ども達と絵本の世界を共有できる一時は、朗読の好きな私にとって、喜びと共に学びの時でもあります。「ああ、面白かった」と子ども達が楽しんでくれた中の一冊に、『ぼちぼちいこか』（マイク・セイラー作、ロバート・グロスマン絵、今江祥智訳、偕成社）があります。「大きくなったら、なんになろう」

大きくて、重くて、力も強い主人公のカバくんは考えます。消防士を志すも、重みに耐えかねて梯子が壊れてしまいます。その後も、バレリーナ、ピアニスト、宇宙飛行士、手品師……と次々に挑戦しますが、その体格と力強さのゆえに、舞台にめり込んだりロケットに取り残されたり、失敗の連続です。でも、カバくんはめげません。挫折に次ぐ挫折で、早く夢が費えて「どないしたらええのんやろ」と途方に暮れてはいても、決して諦めてはいないのです。

ハンモックで一休み、「ま、ぼちぼちいこか、ということや」と鷹揚に構えています。

子どもの心の中にはたくさんの夢が詰まっています。大人になつたら……だけでなく、してみたいことがいっぱいです。そんな子ども達に、大人はついつい「何かになること」や「目標を達成すること」を期待してしまいがちです。それも大切なことです。が、失敗したり挫折したりすることも、同じくらい大切なことなかもしれません。カバくんの失敗はとてどもユーモラスで、子ども達の笑いを誘います。笑いながら、子ども達は同時に、失敗しても次々挑戦を繰り返すカバくんの姿に勇気をもらつてもいることでしょう。「失敗してもいいんだよ」「のんびりいこうよ」と語りかけるこの絵本には、子どもの時をおおらかに味わう豊かさがあるように感じられます。

子どもの時といえ、最近読み返して魅力を再発

見した本の一冊に、『ツバメ号とアマゾン号』（アーサー・ランサム作、岩田欣三・神宮輝夫訳、岩波書店）があります。湖畔に夏の休暇をすごしに来たジョン、スーザン、ティティ、ロジャのウォーカー家の四人の兄弟と、ナンシイ、ベギイのブラケット家の姉妹の物語です。

ランサムの筆は、子ども達一人一人を生き生きと描き出しています。しつかり者で時に大胆な行動をするジョン、家庭的で思慮深いスーザン、夢想家のティティ、無邪気なロジャ……まるで実在する子どものように、彼らの姿は私たちの心に入り込んできます。イングランド北部の湖水地方をモデルにした風景描写も美しく、物語に添えられた地図と共に読む者の好奇心をかき立てます。そして語られる、冒険に満ちた日々。子ども達だけでキャンプをしたり、帆船を操つたり、六人の子とも達は自然の中で休暇を伸びやかに楽しんでいます。

物語は子どもの視点から描かれていますが、周囲

の大人は子ども達をゆったりと暖かく見守っています。子ども達の冒険を、夏休みを支えているのは、実はこの絆なのではないでしょうか。そのことに気付かされるとき、ランサムのお話に息づく子どもの時は、一層輝きを増すように思われます。訳者の神宮輝夫氏は、「訳者のことば」において、それは「人間がもつとも人間らしくなったときに感じる深い喜び」「人間が人間であるかぎり、持ちつづけざる子どもの心を魅了し、大人をも惹きつけるのも、その故かもしれません。

『ツバメ号とアマゾン号』が夏休みの子ども達の冒険を描いた作品であるのに対し、『こどもの季節』（原田和子作、山脇百合子絵、婦人之友社）は、昭和初期の子どもの日常を、瑞々しく描いています。冬眠中のどんぐりを掘り起こしてしまい、「起こしちゃってごめんね」と葉っぱのお布団をそっと掛け

たり、とり年のとりは何の鳥か、真剣に考えたり……作中の子ども達は、とても丁寧に子どもの時を生きているように思われます。年を重ねるにつれ、時の流れがどんどん速くなるように感じられますが、作中のそんな子どもの姿に、一瞬一瞬を慈しんでいた幼い日々が、鮮やかに、懐かしく、浮かび上がってきます。

作者の原田さんは、作中のカコがそのまま大きくなったような方ですが、お話の最後をこう結んでいます。「子どもの季節」はいつまでも続くよ。なぜって、いきものは、みんなそれぞれ自分の「子どもの季節」を大事にもっているんですもの。（中略）だから、おはなしも決しておしまいにはならないってわけ」と。

子どもの季節はめぐり、生命もめぐり……。情報も、ものも、溢れるようにある今、子どもをめぐる環境はどんどん変化するかもしれません。子どもが子どもの季節をそのままに享受することも、難しく

なるのかもしれない。けれど、子どもの季節は連綿と紡がれていくことでしょう。そのことを、確か

に感じさせてくれる本です。

(立教女学院短期大学)

自己を物語る

— 『きよしこ』 『拡散』 を読む —

浜口 順子

— 星の光る夜、きよしこは我が家にやってくる。すくい飲みをする子は、「みはは」という笑い声で胸をいっぱいにして、もう眠ってしまった。糸が安いから— 『きよしこ』(重松清著、新潮社) P. 13

こんな風に「きよし、この夜」の歌を勘違いして覚えていた少年には、自分とよく似た名前の、目に

見えない友達がいた。おそらく、その少年は著者、重松清自身か、少なくともオーバーラップしている誰かである。吃音があつて、転校のたびに苦手な「か」行から始まる名前を自己紹介しなければならぬ。そんな寂しさを抱いた少年は、「きよしこ」には何でも話ってきた(どもらないで)。きよしこは、「本当に伝えたいことは伝えることができる」